

〈クィア〉に読むこと、〈クィア〉を読むこと

——村田沙耶香『トリプル』

黒岩 裕市

本稿は2019年7月26日に名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリで行なわれた、超域文化社会センター(TCS)セミナー第7回「〈クィア〉に読む、〈クィア〉を読む——村田沙耶香『トリプル』を中心に」の報告である。

当日、私は〈クィア〉という言葉の多義的な用いられ方を確認したうえで、「安易な二項対立を認めない横断的思考や横断的現象」¹という〈クィア〉の解説を出発点に置き、「横断的思考」に基づいて、ジェンダーやセクシュアリティをめぐるさまざまな境界線を問いなおし、その意味を〈クィア〉に読みなおす、読みかえることと、今ここにあるジェンダーやセクシュアリティのカテゴリーにはおさまりきれない「横断的現象」であるところの〈クィア〉を読み解くことというクィア・リーディングの二つの側面——もちろん、両者は関連し合うものではあるが——に目を向けた。そして、村田沙耶香の『トリプル』(初出:『群像』2014年2月号)という短編を、〈クィア〉に読む、〈クィア〉を読むという観点から考察した。本稿ではクィア・リーディングの一つの試みとして、セミナーで私が行なった『トリプル』の読みについてまとめる。

『トリプル』における〈クィア〉に読むということ——トリプルとホモソーシャル

まずは村田沙耶香の発言を取り上げよう。2014年の熊野大学での「文学と女性性」をテーマとしたシンポジウム(座談会)に登壇した際に「小説における女性性というものをどういうふうに考えていますか」という問いを受け、村田沙耶香は「私は女性の性描写が多い小説を書くことが多いせい、女性として生きていくことに圧迫感を抱いていて、怒りをモチベーションに小説を書いているのではないかと思われることが多いが、「怒りを原動力に小説を書いたことはなく」、「いろいろな既成概念が壊れたり、物事の意味が溶けて崩れていくような実験的な行為に興味がある」と述べている。さらに、「当たり前のようにある凝り固まった概念を柔らかくしたいという気持ちが強い」、「その先にある光景が知りたい」とも言う。こうした発言を〈クィア〉と関連づけてみると、「いろいろな既成概念が壊れたり、物事の意味が溶けて崩れていく」ところに「横断的現象」としての〈クィア〉が発生し、また、そうした「実験的な行為」への関心や「その先にある光景が知りたい」という未来への志向性には「横断的思考」としての〈クィア〉がうかがえる。つまり、〈クィア〉という言葉こそ使わないものの、

1

大橋洋一「クィア理論／ホモソーシャルリティ／ホモセクシュアル・パニック／クローゼット／レスビアン研究・ゲイ研究」竹村和子編『“ポスト”フェミニズム』作品社、2003年、p.198。

2

松浦理英子、藤野可織、村田沙耶香、中上紀「文学と女性性」『すばる』2014年11月号、p.249-250、252。

村田沙耶香は〈クィア〉との親和性が大きい作家であるといえよう³。本稿ではこれらの発言を踏まえつつ、テキストをできるだけ丁寧に読むことで『トリプル』の〈クィア〉を検討する。

なお、通常、〈クィア〉に読むとといった場合、「一見固定した性的枠組みが機能している場所に斜めの線を引き」、読み手が「いわば動詞的に「クィアする」とでもいべき介入を通じて、見えない欲望を引き出し、新たな解釈を生産すること」を指すことが多いが⁴、本稿では『トリプル』の中に〈クィア〉に読むという営みが見出せる点に目を向ける。

『トリプル』は高校二年生の真弓が一人称の語り手になっている。デートに出かける準備をしている真弓と母親との日常的な場面から始まるが、そこで母親が怪訝そうに「トリプル」という言葉を持ち出す。『トリプル』の世界では、「十代の間では、今、カップルよりもトリプルで付き合っている子たちの方が多い。三人で付き合うという恋人の在り方は、十代を中心に、ここ五年くらいで爆発的に広がった」(p.125)状態にある⁵。トリプルという交際の形態は海外の人気アーティストによって日本にもたらされ、若い世代に流行したもののだが、真弓は「流行とは大人が言った言葉で、私たちの間ではこちらのほうが自然なことになりつつある。きっと、私たちの間にはずっと潜在的にあったのだと思う。どうして「二人」で付き合うのだろう？ 誰が決めたのだろう？ という想いが」(p.126)と続ける。母親にはカップルで付き合っていると告げているものの、真弓も誠と圭太という二人の男性とトリプルの関係を結んでいる。したがって、既成概念が壊れるところとして、まずは付き合うことが〈2〉という数字には限定されないことが挙げられる。

作中には真弓の母親や、通りがかりのサラリーマンなどトリプルを否定的にとらえる人も登場するのだが、その一方で、真弓の高校ではむしろトリプルのほうが優勢で、カップルの関係を結んでいる友達のリカに干渉する場面もある。つまり、新しい関係もある程度主流化すれば規範となり、強制力を発揮することが示唆されているのである。そうした風潮に対して、「大人の干渉を嫌がるわりには、自分たちだって同じことをしている」(p.140)という真弓は、作品の前半ではカップルやトリプルという関係性のあり方に対して柔らかく考えようとしているといえる。

真弓の語りの中心に置かれるのは自身と誠と圭太とのトリプルである。また、同じ高校には恵美と由紀子と謙二の有名なトリプルが存在していることにも触れられる。要するに、そこには男女が混在しているわけだが、作品の中盤には真弓とリカに対して「私とトリプルにならない？」と女性が声をかける場面もあり(p.147)、トリプルとは同性三人によっても構成されるものであることがわかる。性自認の問題もあるため単純にはいえないものの、トリプルのすべての形態に同性間の恋愛関係が含まれるということになるのである。真弓は「トリプルの恋愛が広がって、性別というものも、恋人になる上で大きな問題ではなく

3 村田沙耶香と〈クィア〉について、『コンビニ人間』と『地球星人』を中心に村田沙耶香の作品を「ジェンダー・クィア」という視点から考察したものに、飯田祐子「村田沙耶香とジェンダー・クィア——『コンビニ人間』、『地球星人』、その他の創作」(『JunCture 超域的日本文化研究』第10号、2019年、p.48-63)がある。また、ジェンダー規範とのせめぎ合いから『ハコブネ』を検討したものに、黒岩裕市「「性別」を脱ぐ、「性別」を着込む——村田沙耶香『ハコブネ』とジェンダー規範」(『現代思想』2019年3月臨時増刊号、p.256-267)がある。

4 村山敏勝『(見えない)欲望へ向けて——クィア批評との対話』人文書院、2005年、p.14。

5 『トリプル』からの引用は講談社文庫版『殺人出産』(2016年)により、本文中に頁数を記す。

なってきたような感じがする」(p.148)と述べているのだが、結果的には異性愛を当然視する性愛のあり方が崩れていくということがひとまずは読み取れる。

さて、その真弓と誠と圭太のトリプルは、男性二人と女性一人によって構成されていても、今ここにある三角関係のホモソーシャルとは異なるものである。三人がトリプルの関係を築ききっかけになったのは、真弓が誠と圭太の親密なじゃれ合いを目撃したことによる。「気の置けない信頼感のようなもの」をベースにした誠と圭太との身体接触——二人の髪がこすれる、誠の「青白い腕」に圭太の「顎から垂れた滴」が落ちる、二人の「小麦色の腕と白い腕がこすれ」といったもの——に真弓は強く引かれたのであった (p.129-130)。こうした見方は、「横断的思考」によって、「ホモソーシャルとホモセクシュアルとが潜在的に切れ目のない連続体を形成しているという仮説を立て」たイヴ・コゾフスキー・セジウィックの〈クィア〉な読みとも重なるものである⁶。さらに、真弓は二人の視線と自身の視線が絡まり合ったことで「傍観者ではなく参加者になった」(p.131)というのだが、三角関係(というよりも三者関係)の「参加者」としてホモソーシャルを読みかえているともいえるだろう。ただし、「参加者」になってからの真弓には、誠と圭太の関係そのものを〈クィア〉に読む気配はあまり感じられず、後述するように、むしろ誠との共犯性を強めていく。

改めて確認すると、セジウィックがホモソーシャルにおいて問題視したのは、ホモソーシャルの基盤にあるミソジニーとホモフォビアである。森山至貴は前者を「三角関係に巻き込まれる女性の意志や欲望を軽視ないし無視する「男の世界」のルールを維持するために、ライバル同士で一種の共犯関係を結ぶ」ことに、後者を「媒介となる女性がいなかった場合、「男の世界」のルールの維持は、その世界から外れたものとしてのホモセクシュアルな関係を見下すことで可能」なることに見る⁷。これらは『トリプル』においてはどうか。そもそも誠と圭太は真弓をめぐる「ライバル同士」ではなく、真弓が三角形の不動の頂点に置かれるわけでもない⁸。また、三人は他の二人の心身の状態に可能な限り配慮しているようであり、「女性の意志や欲望を軽視ないし無視する」ということにもならない。しかも、トリプルの関係を切望したのは真弓であるため、女性が三者関係に巻き込まれる対象にはなっていない。一方、誠と圭太の男性二人もトリプルにおいては恋愛関係にあり、性行為も行なうため、「その世界から外れたものとしてのホモセクシュアルな関係を見下す」ということにもならない。

以上のように、真弓は自覚的ではないものの、ホモソーシャルの〈クィア〉な読みかえが真弓の語りにはうかがえる。だが、見逃せない一節もある。三人でのデートの後、「私と別れると、圭太と誠は友達同士に戻ったみたいで、手を離して何事もなかったようにホームへ向かって歩き始めた」(p.138)というのである。それは「私たちは三人で恋におち、三人で恋人同士になった」(p.134)というトリプルのルールに合致する展開ではあるが、真弓と誠、真弓と圭太が二人になった場合にはどうなのかということは語られないため、結果的に女性がいなかった場合、男性同士の性愛的な関係が忌避されるというホモフォビアについて

6

イヴ・コゾフスキー・セジウィック(上原早苗・亀澤美由紀訳)『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001年、p.2。

7

森山至貴『LGBTを読みとく——クィア・スタディーズ入門』ちくま新書、2017年、p.142-143。

8

圭太の母親は真弓の母親とは異なり、トリプルに「理解ある」というのだが、誠と圭太のことを真弓の「彼氏二人」(p.127)ととらえており、その「理解」はあやしい。

の森山の解説とどこか重なってしまうようにも思われる。換言すれば、ジェンダーやセクシュアリティの既成概念が崩れるところが見出されつつも、そこには既成概念との合致も垣間見えてしまうということである。このことはトリプルの性行為そのものにも読み取れるのだが、次にトリプルの性行為を考察しよう。

『トリプル』の〈クィア〉を読む——トリプルの性行為

『トリプル』における「いろいろな既成概念が壊れたり、物事の意味が溶けて崩れていくような実験的な行為」として、トリプルの性行為が挙げられる。トリプルの性行為とは、「誕生日が早いものから順に、『マウス』という役割を担う」。そして、「手が鳴ったら[……]一言も言葉を発さない」で、「マウス」だけが服を脱ぎ、「身体中の穴で、他の二人のありとあらゆるものを受け止める「口」になる」というものである(p.142)。そこでは男性であるか女性であるかといった性別は無効となり、「マウス」であるか「マウス」ではないかという差異だけが有効になる。しかも、マウスは交代制であるため、「マウス」であるかどうか固定されれない。真弓は「トリプルの恋愛が広がって、性別というものも、恋人になる上で大きな問題ではなくなってきたような感じがする」というのだが、トリプルの性行為はまさに性差を無化する「横断的現象」として描かれるのである。その一方で、「マウスを犯す」(p.145)という表現が示唆するように、トリプルの性行為そのものは暴力的で、そのやり方も三人が自分たちに合ったものを作り出すというよりは——高校二年生の真弓の語りということもあるだろうが——ルールやマニュアルを遵守する儀式化されたものである。

さらに、「マウス」=「口」という性別が刻印されていない器官の名称が用いられていることが示すように、トリプルの性行為においては、性別のみならず、性器を性愛の中心に据えるような考え方、すなわち、性器中心主義も崩れる。「セックスだからといって、私たちは性器にこだわらない」(p.145)のであり、「私たちの性器と、そうでない穴との境目が曖昧になる」のだ。だがそれはあくまでも理想であり、「私たちはまだ性器に触れないとそうはならない」と真弓たち三人は性器中心主義から完全に離れているわけではないことも書き込まれている。「トリプル特有の、このマウス式セックスに慣れると、耳と口だけでもマウス役の子が達するようになるらしい」、「私たちの性器と、そうでない穴との境目が曖昧になってきているような気がした」(下線引用者)といった語り方からも、真弓と誠と圭太はトリプルの理想化された性行為の途上にあるといえるだろう(p.146)。

さて、真弓は『トリプル』の前半では他者にトリプルを強要するような同級生に反発していたのだが、後半になると、その語りに変化が生じる。きっかけは母親との対立である。誠と圭太とのことを知り、罵倒し、殴りかかってきた母親を真弓は殴り返し、家を飛び出す。これ以降の真弓の語りは、カップルの

関係性を絶対視する母親の性愛観を否定するかのようになり、トリプルを絶対視し、カップルを過度に貶めるようになる。

家を飛び出した真弓は助けを求めて近所のリカの家に行き、そこで偶然にリカと男性とのカップルの性行為を目撃してしまう。その行為は「性器という場所だけに追いつくように、二人は一心不乱に腰を動かしていた。身体の中で穴はそこだけだともいうように、ひたすらに血の色をしたペニスを出し入れしている。裸の腕と腕が、脚と脚がからまり、まるで薄気味悪い軟体動物が蠢いているかのようだ。皮膚と皮膚がぶつかる音が、ガラス越しにここまで聞こえてくる」と語られ、視覚的のみならず、聴覚的・触覚的なおぞましさ強調される。また、キスにしても「顔が二つしかないキスは、まるで顔の中で口だけが性器だともいうように互いの唇を食べ合っていた」と述べられるのだが(p.152)、「口」が「性器」と重ね合わされることも、トリプルの性行為における脱性器中心主義的な「マウス」＝「口」の重視とは対照的である。このようにして真弓はカップルの性行為のおぞましさ「吐き気」や「嘔吐感」を抱くことになる。その背景にも「自分もあんな行為の末に生まれたのだろうか？」という自問が示すように、母親への強い反発がうかがえる(p.153)。

リカの家を離れ、公園にたどり着いた真弓のもとに、誠と圭太が駆けつける。真弓は誠と圭太に、カップルとトリプルは「絶対に分かり合えない」「違う生き物」だと述べ、「あんなおぞましいことで私は生まれたの？ トリプルの、ちゃんとしたセックスで生まれた子になりたい」、「お願い、お願い、『正しいセックス』をして。私を浄化して」と告げ、トリプルでの性行為に救いを託すことになる(p.154-155)。真弓の母親がカップルのみを「正しい」ことだと考えたのと同じように、真弓はトリプルのみを「正しいセックス」ととらえるようになるのである⁹。そして、トリプルの性行為で「マウス」になった真弓は「二人の胎内を漂っているような心地よさ」(p.156)に浸り、次のような場面で『トリプル』は締めくくられることになる。

誠が私を慰めるように髪を撫で、私の膣に差し込んでいた指を止めた。そして、圭太に聞こえないくらい小さな声で私に囁いた。／「大丈夫。真弓は清らかだよ。きっと、真弓も、お母さんも、友達も、三人とも清らかなんだ。だから他の人の清潔な世界を受け入れることができないんだ。それだけだよ」／それだけ私に告げると、誠は再び口を閉じ、私を犯すだけの突起へと戻った。／耳と鼻と口と膣に、同時に突起が押し込まれる。どれが誰の突起で、液体で、何が入ってきているのか、そんなことはどうでもいいことだった。私たちは今、夜の中で三人、溶け合っていた。私は二人の胎児になって、二人から流れ出る羊水の中を泳いでいるのだ。／口に広がる苦さで、自分の喉に精液が流し込まれているのがわかった。その時、私の中で膨れていた快楽が破裂した。産まれるような声を思わずあげた瞬間、私の痙攣とともに、空の星の全てが一斉に震えた。(p.156-157)

9 もっとも、『正しいセックス』と括弧付きで表記されており、真弓の意識においても絶対的な「正しさ」という認識はないのかもしれないということが読者に喚起されている。

「二人の胎児になって、二人から流れ出る羊水の中を泳いでいる」、「産まれるような声を思わずあげた」という一節からも、真弓がトリプルの性行為を通して再び産まれてくるような感覚を得るといことが読み取れるが、そこでは産む側が二人で、二人とも男性であるという点が興味深い。出産のイメージを通して、男性／女性や〈2〉と〈3〉、さらには自己と他者（誠と圭太は「二人」と称される）の境界線が曖昧になる、まさに「横断的現象」が繰り返られるのである¹⁰。

このように、男性二人が子供を産むというイメージも既成概念が崩れていくところに違いない。だが、追いつめられ憔悴し、カップルとトリプルはまったく別のものだという考えを強固にしていく真弓の一人称の語りのバイアスをはずしてみると、最後の性行為の場面からはどのようなことが見えてくるだろうか。まず注目したいのは、性行為の最中に誠が真弓に言葉を発するという事である。心配性だという誠の性格と合致する振る舞いではあるのだが、トリプルの性行為の途中では「一言も言葉を発さない」はずであった。そうなると、発言内容以前に誠が真弓に囁いたという行為自体がルール違反となる。しかも、誠は「圭太に聞こえないくらい小さな声で」囁いたわけで、ここに三人ではなく、真弓と誠の二者関係が際立つことになる。

さらに、性行為そのものにも再び目を向けよう。真弓は誠と圭太の胎児になったかのように感じるのだが、実際には「口に広がる苦さで、自分の喉に精液が流し込まれているのがわかった」というように、誠か圭太のどちらか（あるいは二人）が真弓の口の中で射精をしたということである。作品の中盤での圭太を「マウス」とした性行為では「今日は、私は下着をずらして足の間の突起をこすりつけたりはしなかったし、誠もズボンのチャックを下ろすことはなかった」（p.146）という一節があるのだが、それとは対照的である。しかも、真弓がリカと男性のカップルでの性器中心主義的な性行為や「まるで顔の中で口だけが性器だともいようなキスをおぞましいものとして語っていたことを思い起こしてみると、最後のトリプルの性行為も十分に性器中心主義的なものであり——産まれなおしの儀式的な行為として崇高なものとして語られているとしても——真弓が貶めたカップルの性行為と大きく違っているとはいえない。むしろトリプルの性行為の不十分さや不完全さが露呈されることになるのである。

なお、誠は圭太を「マウス」にした際には自身の性器を用いることはなく、一方、最後の場面では、誠か圭太かはわからないが、真弓を相手に男性が最終的に自身の性器を用い、自身もオーガズムに達する展開になるというのも、男性間の身体接触の忌避と読めないこともない。いずれにしても、「トリプルの恋愛が広がって、性別というものも、恋人になる上で大きな問題ではなくなってきたような感じがする」という真弓の言葉を裏切って、性差が再浮上してきてしまうのである。

以上のような『トリプル』に関する読みを、私は「〈クィア〉」に読む、〈クィア〉を読む——村田沙耶香『トリプル』を中心に」で提示した¹¹。

10

真弓はそもそもトリプルの性行為を出産と重ねて語っている。母親と衝突する前の圭太を「マウス」とした性行為でも真弓は圭太を「赤ん坊」（p.143）とみなし、自身を「子供を産んだあとの母親」（p.145）になぞらえていた。

11

セミナー当日はディスカッションの時間にフロアの方々から貴重なご指摘をいただいた。たとえば、トリプルという新しい関係性をめぐって、進んでいる／遅れているものとして外国／日本、若者／大人といったステレオタイプ的な二元論が前提とされていることや、トリプルの性行為の正当性を語る際に「汚れ」（p.155）や「浄化」といった排除や差別を喚起する表現が用いられていることを再検討するコメント、さらには、トリプルでの性行為とは、真弓という少女にとっては、母親が体現するような生殖に結びついた異性愛体制に取り込まれずに生きる可能性を探索するものではないかといったコメントである。いずれも『トリプル』だけではない村田沙耶香の作品に深く関わる論点であり、今後の課題として考えていきたい。

私は『トリプル』の読みにおいて、ジェンダーやセクシュアリティをめぐる既成概念が壊れる、崩れているところに目を向けるのと同時に、崩れたはずの既成概念が残存する、あるいは、再浮上してしまうところにも光を当てた。それは一面では村田沙耶香の「横断的思考や横断的現象」の不十分さ、換言すれば、『トリプル』の〈クィア〉の不十分さを指摘することにもなる。しかし、私はその点を否定的にとらえてはいない。というのも、それは今ここにある規範の根強さがテキストに書き込まれているということでもあり、そこに目を凝らすことなしには、「その先にある光景」にたどり着くことはできないと考えるからである。最後にクィア・リーディングに関連づけていえば、〈クィア〉とは現在の「その先」にある性や生のあり方を志向するものであり、そこに〈クィア〉の強みがあることは間違いのないのだが、今ここにある問題を見据えることなしに、「その先にある光景」を描くことはできない。テキストをできるだけ丁寧に読むことを通して、クィア・リーディングをテーマとしたセミナーの場で私はこのことを再確認したかったのである。